Osaka University Knowledge Archive

Title	近代日本知識人の中国論 : その構造と変容
Author(s)	胆, 紅
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49083
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	胆（たん）　紅（こう）
博士の専攻分野の名称	博　士（国際公共政策）
学　位　記　番　号	第　２１５２１　号
学位授与年月日	平成 19 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 国際公共政策研究科比較公共政策専攻
学　位　論　文　名	**近代日本知識人の中国論－その構造と変容－**
論文審査委員	（主査） 教　授　米原　　謙 （副査） 教　授　中尾　敏充　　教　授　瀧口　　剛

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、近代日本の知識人たちが、歴史上（幕末から日中戦争期まで）、中国とどう向き合ってきたのかを、その実相に則して政治思想的に考察したものである。

先行研究を見れば分かるように、幕末から 1945 年までの期間に亘って、日本知識人の中国論を通観した単著は見当たらない。幕末から 1945 年という一世紀ほどの期間を通観した単著がないのは、対象が大きいからであるが、もっと別の理由もある。この時期の日本人の中国観は、大きな流れとしては、中華意識からの脱却、西欧への接近と脱亜論、そして興亜論へと変化した。しかし、個々の思想家を分析すれば、必ずしもこのように単純化できない。従って、個別の思想家を超えた構造を発見しなければならないという困難がある。私は、本論文において、日本人の中国観を次のように時期区分して把握した。

第１期　「脱亜」的アジア像の形成――幕末から 1880 年代末頃まで――
第２期　国民主義の勃興と「脱亜」意識の構造化――1880 年代から日清戦争まで――
第３期　「脱亜」と「興亜」――日清戦争後から日露戦争頃まで――
第４期　大日本帝国の成立と中国観の変容――第一次世界大戦前後――
第５期　「東亜協同体論」をめぐって――戦時下日本の中国論――

以上の時期において、近代中国と深くかかわり、中国問題に関心をもった学者や優れたジャーナリストたちは、如何なる中国論を展開していたのだろうか。一つの接近方法として、本論文では、アヘン戦争後の東アジア秩序の変動、欧米諸国との協調と対立、日本と中国ナショナリズムの相克などの観点を焦点にしてアプローチした。

第一章は、福沢諭吉の論説を中心に、アヘン戦争から 1880 年代末頃の「脱亜」的アジア像の形成を概観する。そこで、福沢のアジア論がいかなる意図にもとづいて書かれたかを明らかにしたい。また、彼のアジア論を『文明之概略』に示された文明論との関係で考察する。

第二章の 1880 年代から日清戦争までの清国論については、明治 20 年代のジャーナリズムを二分した新聞『日本』と雑誌『国民之友』のそれぞれ主筆、陸羯南と徳富蘇峰の論説を中心に取り上げる。日清戦争勃発直前には、この二つの代表的言論機関は、相互に歩み寄ったが、その理由も考察する。

第三章では、日清・日露戦争の中国論の動向を、主にアジア主義者として知られている北一輝と脱亜論者の徳富蘇峰の論説を中心に考察する。そして相反する主張をした二人の論調に共通する論理構造があることを解明することに努めた。

第四章では、この時期の帝国主義の中国論を中国の近代ナショナリズムの胎動との関係において考察した。まず、『東洋経済新報』の論説を、蘇峰や内藤湖南、吉野作造のほか、『読売新聞』や『中外商業新報』などいくつかの新聞論説と比較し、その独自性を論証する。そして、五・四運動におけるジャーナリズムの反応を検討して、最後に、民本主義者の吉野作造の日中提携論について考察する。

第五章では、日中戦争期の尾崎秀実の論説を、昭和研究会メンバーの蝋山政道や東亜連盟論の提唱者石原莞爾の論説と比較し、東亜協同体論の意図と歴史的意味を検討した。

論文審査の結果の要旨

この博士学位請求論文は、以下の５つの章からなっている。第１章/「脱亜」的アジア像の形成、第２章/国民主義の勃興と「脱亜」意識の構造化、第３章/「脱亜」と「興亜」、第４章/大日本帝国の成立と中国観の変容、第５章/「東亜協同体論」をめぐって。

以下、まずその概要を紹介する。第１章では、アヘン戦争を契機とする東アジア世界の変容を中国を中心とする華夷秩序の崩壊として特徴づけ、幕末から日清戦争までの時期に、日本・中国・韓国の関係が根本的に変化したと説明されている。著者によれば、こうした変化を典型的に表現したのが「脱亜論」で、それは福沢諭吉の 1880 年代の論説にもっとも見事に表現されている。第１章の後半では、福沢が文明対野蛮という図式から、脱亜という命題を提出したことが説明されている。第２章では、1880 年代末から日清戦争期までが扱われている。この時期のジャーナリズムを代表するのは徳富蘇峰の民友社と陸羯南らの政教社だったが、著者は後者を主たる分析対象としながら、前者と比較している。そして対照的なアジア観を表明していた両者が、日清戦争を契機にして接近し、ともに脱亜的認識で一致するにいたる経緯をたどっている。

第３章では、日清戦争から日露戦争までの時期が扱われ、徳富蘇峰と北一輝が主たる分析対象となっている。蘇峰が脱亜的な見地から、二つの戦争における日本の立場を正当化しようとしたのに対して、北一輝はアジア主義を唱導して、異端的な少数派の立場に立っていたことが説明されている。第４章は第一次世界大戦前後を対象にし、前半では『東洋経済新報』の論説の特徴が他の新聞雑誌の論調と比較されて丁寧に分析されている。後半では五・四運動期の新聞論調が、『外交時報』、支那学者の内藤湖南などを素材にして分析されている。そして多くの知識人が中国民衆のナショナリズムの勃興を的確に理解できなかったことが指摘され、さらにそれとの対照で吉野作造の中国理解が紹介される。最後の第５章は、日中戦争期の国策的な意味をもった「東亜協同体論」を分析し、蝋山政道と尾崎秀実の議論が対照的な位置を持つものとして説明されるとともに、中国の文献において日本の「東亜協同体論」がどのように受け止められたかが紹介されている。

この学位論文の特徴は構想の大きさと渉猟された文献の多さである。著者自身も指摘しているように、江戸時代末期から 1945 年までという長期間を対象に、一人の著者が日本人の中国論の特徴を通観した著作はこれまで存在しない。こうした大きなテーマを、外国人留学生である著者が３年余りの間に、一応、全体を見渡すことができるだけの構想力で描ききったことは高く評価されねばならない。渉猟した文献も、福沢諭吉、陸羯南、徳富蘇峰、北一輝、石橋湛山、吉野作造、尾崎秀実などの有名な思想家の著作だけでなく、一般的な新聞雑誌の論説に及んでおり、読破された文献の多さも賞賛に値する。むろん叙述のなかには分析が不十分な部分もないわけではなく、特に北一輝や吉野作造などはもっと深い読解がありえただろう。しかし多量の文献を読破して、それを構造的に理解しようとした内容は著者の優れた能力を示しており、審査委員会は一致して、本論文が博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。